下関市立小串小学校

１　研究主題

学びに向かい、確かな学力を身につける子どもの育成
～複式指導の手法を取り入れた授業を通して～

２　研究主題について

（１）主題設定の理由

①今日的教育課題から

近年、情報技術の飛躍的な進化等を背景とした人工知能（AI）の急速な進化やグローバル化の進展などに伴い、社会の変化は加速度を増し、複雑で予測困難となってきた。そのような社会の中で、子供たち一人一人が、直面する様々な変化を柔軟に受け止め、感性を豊かに働かせながらどのような未来を創っていくのか、どのように社会や人生をよりよいものにしていくのかを考え、予測できない変化に受け身で対処するのではなく、主体的に向き合って関わり合い、その過程を通して、自らの可能性を発揮し、よりよい社会と幸福な人生の創り手となっていけるようにすることが必要である。

このような時代において、子供たちが未来を切りひらくために必要な資質・能力を確実に育成することを目指し、子供たちに求められる資質・能力とは何かを社会と共有し、連携する「社会に開かれた教育課程」を重視している。また、現行学習指導要領の教育内容を維持した上で、知識の理解の質を更に高め, 確かな学力を育成すること、加えて、道徳教育の充実や体験活動の重視、体育・健康に関する指導の充実により、豊かな心や健やかな体を育成することとしている。

つまり、**知識の理解の質を高め資質・能力を育む**「主体的・対話的で深い学び」を、「何のために学ぶのか」という学習の意義を共有しながら、「何ができるようになるか」を明確にして、**授業の創意工夫や教科書等の教材の改善を引き出して**いけるよう、全ての教科等を、1．知識及び技能の習得　2．思考力、判断力、表現力等の育成　3．学びに向かう力、人間性等の涵養　という三つの柱で再整理されたところである。

②本校の教育目標から

本校では、「自ら学ぶ小串小」を教育目標に掲げ、豊かな感性や確かな学力を育むための教育を推進している。この具現化のために、体験活動の充実や地域の方との交流活動の推進、心の教育の推進、個に応じた指導の充実などを進めてきた。その中で、本年度の重点取り組み事項を、①学力向上　②思いやりの心の涵養　③基本的な生活習慣の定着　とした。特に、学力については、子どもたちが主体的に取り組む授業、ICT の活用、「書くこと、聴くこと、話すこと」を大切にした教育実践を進めていきたいと考える。

③これまでの研究実践と子どもの実態から

本校の児童数は、現在４０名で、１・２年及び３・４年、すばる学級は複式学級、他の学年は単学級である。子どもたちは、地域の方々の温かい眼差しに支えられ、明るく素直に育っている。しかし、幼い頃から変化の少ない友達関係の中で生活していることから、お互いに高め合おうとする態度や、自分で考えて物事に取り組んでいこうとする態度を育てていくことが課題として挙げられてきた。

本校では「かかわり合い」を「学習材・学習仲間・学習者自身」の３つの視点でとらえ、研究を進めてきた。平成２６・２７年度は「自分の考えをもち、学び合う子をめざ

して」、平成２８年度は「分かりやすく表現し、学びの深まる伝え合い活動の工夫を通して」、平成２９・３０・３１年度は「学びがより深まる伝え合い活動をめざして」というサブテーマで研修した。その結果、「話し合いに積極的に参加する子どもが増えた。」「以前より、教え合い、聞き合う姿勢が身に付いてきた。」「自分の考えをもって物事に取り組んでいくことができるようになってきた。」などの成果を挙げることができた。

その一方で、自分やみんなの考えをよりよいものに高め合っていこうとする意識が育ってきているものの、友だちの考えを聞いて自分との違いやよさを考え判断するまでには至っていない。また、自分の考えをしっかり言葉にしたり、書いたりすることが十分に出来る児童と、思いを言葉に出来ず、書くことを面倒くさがって取り組まない児童との、学力の２極化がみられた。そのことにより低位の子どもの学習意欲が見られず、学習に向かう姿勢に課題があると思われた。

そこで、令和２年度より研修主題を「学びに向かい、確かな学力を身につける子どもの育成」とし、そこで、学びに向かう子どもの育成に焦点を当てて研修を進めていくこととした。令和２年度は、見通しを持たせることで、学習意欲を喚起することを研修の重点とした。児童にとって身近な課題やわかりやすい問題、既習事項の復習からの導入など様々な手法を取り入れることで、ある一定の成果を見ることはできた。

しかしながら、基礎・基本的な学力の定着が難しく、一般的な複式の授業形態が、本校の児童の実態にそぐわない面が見られた。本年度は、児童の実態に寄り添った研修、授業形態の確立を追求したい。

３　本年度の取組の視点

① 児童が自分の考えを明確にし、全体に伝え広げ共有する算数科の授業

・自分の考えを明確にするため、線を引く、丸で囲む、絵や図にかくことの積み上げ

・自分の考えを、ノートに言葉で書くことの積み上げ

・自分の考えを、分かりやすく表現するための方法や支援（各学年の評価話型）

・話し合いの仕方や形態の工夫、児童が考えを深め広げるための指導の工夫

② 子どもたちが自ら学ぶ複式指導の充実

４　研究の実際

（１）授業研究

９月１５日（水）６年　算数科授業研究

単元名：立体の体積

ねらい：角柱の体積を求める方法を使って、複雑な立体の体積をもとめることができる。

指導者：下関市立川棚小学校　教頭　三谷　朱美　様

指導内容

① 学力向上推進教員として児童と関わった経験から

・低学年の学びの様子と今を比べて、成長したところと課題として残ったところ

・自己実現力を高めること、一人で学べる力を育てていくために、子どもの思考に寄り添った授業を実践する。

② 本時の学習活動から

・授業のねらいは適切であるか。

・子どもたちが学習課題や解決方法に対する見通しを明確にできているか。

・「学び方のスキル」を育成するために必要なことが整理されているか。
・「見通しと振り返りのある授業」が意識されていてその振り返り方が定着を感じる。
・ICT を活用して、図形を手元でイメージしやすくできていたところがよかった。

○　今後の小串小の課題
・家庭や地域とつながり、成果と課題を共有し、持続可能な取組を行う。

１１月２４日（水）第３・４学年　算数科授業研究
単元名：３年「式と計算」
　　：４年「図をつかって考えよう」
ねらい：３年「べつべつに考えたり、１組にして考えたりして求めることができる」
　　４年「順にもどす考え方で、求めることができる」
指導者：下関市教育委員会　生徒指導推進室　室長補佐　林　　哲史　様
　　教育研修課　　主　　査　岡本　幸治　様

指導内容
≪子どもの実態からとらえた課題≫
・基礎・基本の学力を定着させること
・自分の考えを進んで表現すること
・相手の考えをくみ取ろうとすること
・お互いに学び合いながら高め合うこと
≪授業参観からとらえた視点≫
・最初の問いが、進んで考えたり、ともに学び合ったりすることで、質の高い問いになること
・自分の考えを相手に伝えるためのわかりやすい伝え方を知っておくこと

２月２日（水）第１・２学年　算数科授業研究
単元名：１年「大きい数」
　　２年「九九のきまり」
ねらい：１年「買い物場面でお金の出し方を考えることを通して、数の合成・分解に習熟し、数の感覚を豊かにする」
　　２年「簡単な（２位数）×（１位数）について、同数累加の考え方や交換法則などを使って答えを求めることができる」
指導者：下関市立関西小学校　校長　柴田　千明　様

協議内容
○　複式指導の方法や内容について
・同時スタートがスムーズに行なえたか。
・それぞれの学年の評価が、適切に見とれたか。
・まとめ、振り返りまでの時間内に行なえたか。
・複式指導の指導法にこれが絶対はないが、児童の実態に合わせて支援の方法を工夫しながら対応していくこと

・来年度、複式学級が２学級の可能性が大きいことで、誰でも受け持つことができるように有意義な研修会ができた。

・指導案上の直接指導と間接指導の設定に前回（11/24）の研修が生かされていた。

（２）複式教育研修

複式学級が配置され、今年度で３年目となり、複式学級も２学級に増えた。来年度までは、複式学級が２学級の配置であるが、令和５年度より完全複式学級となる予定である。そこで、全担任が複式学級における授業のあり方を実際に見て、研修を深める必要があるため、隣接校である宇賀小学校で行われる「へき地・複式教育研究協議会」に全教員で参加した。

〇山口県及び下関市立へき地・複式教育研究協議会
期　日　　令和３年１０月１５日（金）
指導者　　美祢市教育委員会学校教育課　指導主事　杉山　夕子　様

また、宇賀小学校とは同じ中学校区ということもあるので、次年度以降も、授業研究等への参加ができるようにお互いで共通理解をしている。また、指導者の杉山指導主事は、昨年度も宇賀小学校の校内研修の指導者として来られていたので、指導についての様々な質問などができて、研究協議会への参加は大変有意義であった。

５　成果と課題

〈成果〉

コロナ禍での学びのあり方も考慮しながら、主体的に学んでいくことをどのように位置づけるとよいか、各担任が悩むところであった。今年度も、算数科に焦点を当て研究授業と互見授業の２つの方法で進めた。算数科の授業を行うに当たって「小串小学びのスタンダード」を共通理解し、指導の積み上げを行ったことで成果が上がってきた。

「小串小学びのスタンダード」
〇　題意を正確につかむために、
・文章題の数やキーワードを〇で囲む、問われていることに線を引く。
〇　思考の過程では
・数図ブロックなどの具体物やテープ図、線分図、関係図などを効果的に活用する。
・考えを確かにするために、式と答えだけでなく、なぜそう考えたかを文章で書く。
〇　考えを深めるために
・ペアや小グループで意見交換をする。
・全体の場では、「は」（速く）「か」（簡単に）「せ」（正確に）できる方法を吟味する。
〇　習熟を図るために
・１単位時間の中で、必ず類題に取り組む。

授業研究に本助成金を活用して指導者を招聘し、「主体的・対話的で深い学び」を実現するための授業のポイントについて研修を深めることができた。そのほかにも、教職員のスキルアップや学級経営に特化した研修も多くはないが位置づけることができた。

延期になっていた山口県、及び、下関市へき地・複式教育研究協議会が今年度実施されたことで、宇賀小との小小連携は、更に深まり本校にとって大きな刺激となった。学習リーダーの育成と、「ずらしやわたり」での教師の限られた時間内での支援など、今後も研修のポイントを多くもらうことができた。

〈課題〉

○　学力向上

地域の方々の中から「学習支援ボランティア」を募り、低学年の算数科を中心に協力をいただいているが、コロナの感染予防対策で、今年度は実施することがとても難しかった。基礎的な四則計算が正確にできないこと、問題文の理解ができずに正しい立式ができないことなどがあるため、個別支援を心掛け間違いをそのままにしないようにしながら、正答を導き出せるように引き続き支援をしていきたい。

○　学びに向かう力の強化

今年度の課題について解決できたとは言い難いため、来年度も、複式教育の指導法を軸にし、リーダー学習を進めることで、リーダーとして学習をコーディネートすることを児童自身も受け入れて、一歩先に進むことができるようにしたいと考えている。子どもがめあてと見通しをもって自力解決に取り組み、意見交流を通してよりよい課題解決の方法を見つける喜びを味わうことができるように支援をしていくことで、教師の支援と児童の学びとのバランスをとり進めていくことができると考える。